語の全体像をつかませ，応用力を高める指導
――『プラクティカル ジーニアス英和辞典』を使って

佐藤哉二

生徒が辞書を引く目的は何か。考えるまでもなく，それは「単語の意味を知るため」であろう。

その証拠に電子辞書をもつ生徒が急増しているようである。単語の意味を調べるというか「知る」には，電子辞書ほど手軽で便利なものはない。

電子辞書の功罪はあちこちで研究され始めているので，本稿では「紙の辞典」「書籍版」の『プラクティカル ジーニアス英和辞典』を用いた辞書指導の例を述べてみたい。

■本義・原義を読ませる

紙の辞典でもやはり単語の意味を知るために生徒は辞典を引く。その時の指導として重視したいことがいくつかある。

まず１つとして，第１の語義に飛びつく生徒に，見出し語に続く発音の次にある「本義」あるいは「原義」を読ませたい。本義・原義はその語の全体像をつかむための打ち出の小槌とも言うべきものだからである。例を見てみよう。

rise/ráiz/【「下から上へ動く」→「発生する」】

具体的な目に見える〈人・物〉が立ち上がり，上昇する。目に見えない〈価格・地位〉などが上がる，高くなる。さらに〈感情・涙〉などが湧き上がる。

このようなイメージをしっかり生徒が理解できれば，

The aircraft rose slowly into the air.

では rise と fly の違いまでイメージできよう。

Duncan felt the hairs rise on the back of his neck. では，たとえ辞書に「〈髪の毛が〉逆立つ」の語義がなくても，あのぞーっとする感じを追体験して理解できるに違いない。

そして実際に髪の毛が動くわけではないのに rise が使えるのを知ることになる。これが理解できれば，

His anger rose at her insult.

（彼女の侮辱で彼の怒りがつのった）

A big rock rose out of the sea.

（大きな岩が１つ海面から突き出ていた）

The road rises steeply from the village.

（道は村から急に上り坂になっている）

などの状態や心理的な起伏の表現にも使えることが分かる。

■多義語のグループ分けを利用する

先に本義・原義はその語の全体像をつかむための「打ち出の小槌」だと喩えたが，その打ち出の小槌から振り出されるのが，重要度の高い A，B ランクの多義語に採用されているローマ数字Ⅰ，Ⅱ，Ⅲのグループ分けされた語義である。

これもその語の全体像を壊すことなく，語義と語義の際立ちを知らせている。

rise

Ⅰ［数量・程度が増加する］

Ⅱ［上がる］

Ⅲ［立ち上がる］

Ⅳ［発生する］

rise は「有形無形のものが下から上方へ立ち上

がっていく」というのが全体的イメージなのだ，とⅠ，Ⅱ，Ⅲでつかんだら，個々の具体的例へ誘導したい。

「上がる」「立ち上がる」など主語があれこれ多岐にわたるグループでは，具体的にそれぞれの語義区分に主語が〈 〉で示されている。たとえばⅢ［立ち上がる］には〈人などが〉〈議会・法廷などが〉などがあるので，生徒はさらに具体的に rise の使用範囲を知ることができる。

make のように主要語義「作る」だけでは全体イメージをカバーできない語の場合も，この大グループ分けとその区分内の選択制限と具体的語義が役に立つ。

このように，教科書や授業で出てくる単語とは切り離して，毎時間 5 分程度でよいから Word of the Day を指定して，その語の全体的イメージを説明し，生徒に意味の総合的な理解をさせることもできるという一例である。

重要語の ⁂ 印をつけてあるＡランクの語は約1100語あるが，そのうちの語義区分の多い，いわゆる多義語だけでもとりあえず，始めてみてはいかがであろうか。

■辞書指導はいつ終わるのか

「辞書指導」という言い方から，単語の引き方や知りたい文章に類似する用例の発見の仕方を教えることが主となるのは当然であろうが，さらに語法注記，文化情報など，さまざまな種類の情報が満載されていることを知らせるのも指導の１つである。だが辞書指導は生徒が卒業するまで続けることはできないし，その必要もない。とすると辞書指導は，何をもって任務完了となるのだろうか。

導入時の「辞典の使い方」に関しては，アルファベット順から始まり，文型，連語関係の調べ方なども対象となる。これには『プラクティカルジーニアス英和辞典』準拠の『活用ワークブック』も用意されているので編集部へ問い合わせればよい。

さて，生徒が自分で辞書を引くためのスキルを教えると辞書指導は終わるのであろうか。

確かに前掲の『活用ワークブック』を終えると，たとえば，I'm looking forward to hear from you soon. が文法的に正しいかどうか。「外国人は日本人に比べて鼻が高い」の「高い」に high が使えるかどうか。これらを生徒がひとりで調べ，答えを得ることができるようになる。それで入門期の辞書指導は任務完了となろう。

■用例でコンテクスト設定ゲームを

辞典の用例はスペースが限られているために，コンテクストから切り離されている。たとえば want 名 1 に次の用例がある。

The plant died from want of water.（その植物は水をやらなかったので枯れてしまった）

want の不可算名詞の例なのだが，コンテクスト次第で聞き手を責めていることにもなることに機を見て触れてみる。

リーディング指導では文脈があるので，

Big deal!（そりゃたいしたもんだ）

が文字通りの意味なのか，反語的に使われているのかが分かる。

The boss measured me by my academic background.（上司は私を学歴で判断した）

も，この文がどういう場面で発話され，何を言いたいのかを生徒に尋ねてみる。

普通の意味の「辞書の引き方」からは少々逸脱した指導かもしれないが，辞書が引けるということに，その文章の発話された意味・意図を理解することまでをも含めるなら，文法指導から一歩踏み出した，しかも言葉の理解の大切な脇道に入る辞書指導もあってよいのではないだろうか。

言葉は伝達の手段である。その目的が達成できるようになったときが，本当の任務完了かもしれない。

（さとう　さいじ・元埼玉県立高等学校教諭）